DEATH AND LIFE
SOCIAL MEETING

第４回死生懇話会 会議録

日　時：２０２３年3月１８日（土）
　　１３時３０分～１６時００分
会　場：滋賀県庁新館７階大会議室

滋賀県では、誰もが避けられない「死」について真正面から考えることで、限りある「生」をより一層充実させる施策につなげる契機とするために、様々なお立場やご専門の方からなる「死生懇話会」を 2020 年 12 月 2 日に設置しました。

この懇話会は、どう生きるのが良いかといった価値観を押し付けるものでは決してなく、「死」や「生」の捉え方等についての様々な考え方や取組の情報を発信していくことで、それに触れた方に、それぞれのアンテナにひっかかる“何か”を見つけていただき、より豊かに生きるヒントを見つけていただきたいとの思いで開催するものです。

また、今後、多死社会を迎える中で、行政の役割や行政へのニーズもこれまでとは変わってくるのではないかと考え、「死」を捉えた「生」のあり方について、皆さんと議論を深め、様々な視点からご意見や情報をいただくことで、多死社会において行政ができること、人生 100 年時代に行政に求められることが何かを探っていきたいと考えています。

この冊子はその「第４回死生懇話会」の内容を会議録としてまとめたものです。

※懇話会の中でゲストスピーカーの國森 康弘さんより写真講演がありましたが、その部分については、講演概要として掲載しております。

Mother Lake
滋賀県

【第４回死生懇話会　出演者】

國森 康弘さん（ゲストスピーカー）
　写真家・ジャーナリスト
打本 弘祐さん（死生懇話会委員）
　龍谷大学農学部植物生命科学科 准教授
越智 眞一さん（死生懇話会委員）
　一般社団法人 滋賀県医師会長
楠神 渉さん（死生懇話会委員）
　滋賀県介護支援専門員連絡協議会 副会長
藤井 美和さん（死生懇話会委員）
　関西学院大学人間福祉学部人間科学科 教授（死生学研究者）
ミウラ ユウさん（死生懇話会委員）
　NPO 法人好きと生きる 理事
　一般社団法人こどもエンターテインメント 代表理事

上田 洋平さん（ファシリテーター）
　滋賀県立大学地域共生センター講師
三日月 大造
　滋賀県知事

〔13時30分　開会〕

○事務局（滋賀県企画調整課　山田）

お待たせいたしました。お時間になりましたので、第4回死生懇話会を始めさせていただきます。

私は、滋賀県企画調整課の山田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）ありがとうございます。

この死生懇話会は、誰もが避けられない死と向き合い、そこからより豊かに生きるヒントを得ようと、また、こういった根源的なテーマについて多くの方が考え、語る機会をつくろうと、様々なお立場の方にご参画いただきながら、これまで3回にわたり、公開で議論してまいりました。本日は、その第4回目として開催させていただくものです。

はじめに、本日の出演者の皆様をご紹介します。

本日、ゲストスピーカーとして、写真家でジャーナリストの國森康弘さんにお越しいただいております。

○國森康弘さん

よろしくお願いします。（拍手）

○事務局（滋賀県企画調整課　山田）

この後、國森さんよりご講演をいただき、その後の意見交換にもご参加いただきます。

次に、死生懇話会委員の皆様です。

龍谷大学農学部植物生命科学科　准教授　打本弘祐さんです。（拍手）

一般社団法人滋賀県医師会長　越智眞一さんです。（拍手）

滋賀県介護支援専門員連絡協議会　副会長　楠神渉さんです。（拍手）

関西学院大学人間福祉学部人間科学科教授　藤井美和さんです。（拍手）

NPO法人好きと生きる　理事、一般社団法人こどもエンターテインメント　代表理事　ミウラ　ユウさんです。（拍手）

そして、死生懇話会のファシリテーターを

務めていただきます滋賀県立大学地域共生センター　講師　上田洋平さんです。（拍手）

最後に、滋賀県知事　三日月大造でございます。

〇三日月大造

はい、よろしくお願いします。（拍手）

〇事務局（滋賀県企画調整課　山田）

それでは、まず、滋賀県知事　三日月大造より、開会に当たって一言ご挨拶申し上げます。

〇三日月　大造

皆さん、こんにちは。

だんだん暖かくなる春の土曜日に第4回の死生懇話会にご参加いただきまして、ありがとうございます。

3年を超えるコロナ禍、こうして皆さんと時間と空間を共有できますことを大変うれしく思います。

今日もう一つうれしかったのは、司会の山田さんが「よろしくお願いします」と言ったときに拍手が沸きましたね。こんなこと、初めてじゃないですか（笑）。だんだんこの会も皆さんと一緒につくり上げられているなと、そういう思いがいたしました。

今日は、ゲストスピーカーに國森さんにお越しいただきました。楽しみにしております。また、毎回ファシリテーターという難しいお役目を喜んで引き受けていただいております上田さんにも感謝したいと思います。

また、今日は、会場で視聴いただく皆さん、ウェブで視聴いただく皆さんもたくさんいらっしゃると聞いております。どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど司会の山田さんからありましたように、誰も避けられない死というものを私たちの人生で、地域で、暮らしの中で遠ざけることなく直視したり、また考えたりして、だからこそ生きていること、共に生きていることを大切にしよう、そしてそこに一人一人意味を持たせていこうと、こういう思いでこの死生懇話会を始めました。

今年度、関連企画といたしまして委員の皆さんでリレートークイベントを開催していただきまして、生きづらさとか暮らしの中の死というものについて議論を深めていただ

いたところです。また、先月は県立美術館で「美術作品から見る『死生観』」ということで、例えばキリスト教ではどうなのか、中世・古代はどうだったのかというようなことなどもみんなでお話しいたしまして、豊かな時間と空間を共有することができました。

今日は、紛争地や被災地、また在宅の医療、その中での看取りなど、現場でいろんな瞬間を捉え、写真に収めてこられた國森さんと一緒にお話しすることで、死というもの、そこに至る生きるということ、また老いるということ、病と付き合うということなどについて皆さんと一緒に考えられたらなと思っております。

コロナの3年で大きく社会が変わったんじゃないかなと思います。お別れができなくなったとか、つながりが薄くなったとか、行きたいところに行けなかったとか、そういうこともある反面、こうして今日も藤井さんとはウェブでつながってますけど、ウェブでつながってお話しすることも以前よりもできるようになったのではないでしょうか。

世界では、例えばウクライナでは、トルコ、シリアでは、戦争や大きな災害で今もとても厳しい状況に追いやられてしまっている方々がいらっしゃいます。だからこそ、今日、今、こうしていること、一緒にいること、話せることもぜひ大切にしたいと思いますし、感謝したいと思います。

最後になりましたけれども、この懇話会はみんな「さん」付けで呼ぶことにしています。その持っている立場や肩書きにとらわれず話せるようにしようということで初回からそういう進め方をしておりますので、ぜひ会場の皆さん、ウェブで視聴していただく皆さん、何より一緒に話す委員の皆様方にはよろしくご協力いただきますことをお願い申し上げまして、少し長くなりましたけれども、私からのご挨拶とさせていただきます。

皆さん、今日もどうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○事務局（滋賀県企画調整課　山田）

ありがとうございました。

本日は、会場、オンラインでたくさんの方にご聴講いただいております。せっかくの機会ですので、ご聴講の皆様からもご意見やご質問、ご感想などをいただければと思います。

この後、國森さんより「レンズを通して見つめ続けた『生』『老』『病』『死』～限りがあるからみんなでつなぐ～」をテーマにご講演いただきます。その後、ご講演の内容も踏まえながら議論を深めてまいりたいと存じます。

國森さんのご講演についてはもちろんのこと、ふだんの生活の中で生老病死についてお感じのことや、出演者への質問などで

も結構です。ご聴講の皆様よりコメントをお出しいただければと存じます。

コメントの方法ですが、オンラインでご聴講いただいている皆様はZoomウェビナーのチャット機能をご活用ください。会場でご聴講の皆様は、お手元の色紙とマジックを使って、できるだけ大きな文字でお書きください。14 時 50 分頃に予定しております休憩時間にスタッフが集めさせていただきますが、それまでに書けた方がいらっしゃいましたら、お近くのスタッフにお声がけください。スタッフが回収に参ります。

時間の都合上、全てのコメントを取り上げさせていただくことはできませんが、後ほど出演者による意見交換の中でご紹介させていただく予定です。

それでは、ご講演に移りたいと思います。「レンズを通して見つめ続けた『生』『老』『病』『死』～限りがあるからみんなでつなぐ～」をテーマに、ゲストスピーカーの國森さんより約 40 分のご講演を賜りたいと存じます。

なお、ご講演の際に使用される写真の撮影は、PC等でのスクリーンショットも含め、固くお断りさせていただきますので、ご了承ください。

それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

○國森　康弘さん

皆様、こんにちは。

生まれ育ちは神戸市なんですが、20 年近く滋賀県民、大津市民をさせてもらってます。ご縁をいただいて、ありがとうございます。

仕事は写真家ということですので今日も皆さんと一緒にたくさんの写真を見ていきたいと思っているんですが、看取りを含めた「人が一生懸命生きて、そして一生懸命死んでいく」、その姿を写した数々の写真も出てきます。

全国の小中学校で子どもを相手に講演することもあるんですが、同じ写真を見せています。その写真を見せる前に子どもとは一緒に数を数えています。どんな数かというと、それは「子どもがここに生まれてくるのに一体何人のじいちゃん、ばあちゃんがいたか」という数です。自分が生まれてくるのに、単純に言えば、父、母、2人。じいちゃん、ばあちゃん、4人。ひいじいちゃん、ひいばあちゃん、8人。ひいひいばあちゃん、ひいひいじいちゃん、16 人。32 人、64 人、128 人、256 人、512 人、1,024 人、

2,048 人、4,096 人、8,192 人。この辺まで小学生も一生懸命みんなで数えて、8,192 人、1万 6,384 人、3万 2,768 人、6万 5,536 人、13 万 1,072 人、26 万 2,144 人、52 万 4,288 人。そして、ついに 100 万を超えて 104 万 8,576 人と。数えていくと 100 万超えちゃいます、じいちゃん、ばあちゃん。もし、その 100 万を超えるじいちゃん、ばあちゃんのうち、一人でもいなかったら、存在しなかったら、今の自分はこのような形ではここには生まれていないと。ある意味では、奇跡のような長い長い命のバトンリレーがあって初めて今ここに自分が生きている。だから、子どもは、言ってみれば、100 万を超えるじいちゃん、ばあちゃんがつないできた命のバトンを手にした先頭ランナーとしてここに生きているということも言えるんじゃないかというふうに思っています。

自分の背中には 100 万を超えるじいちゃん、ばあちゃんがいたように、自分のまた前には、目の前には、未来には、将来には何千、何万の子どもたちの命もつながっている。そんなバトンを自分はいつか死ぬときに何らかの形で誰かに手渡していく、そんなバトンでもある。

ただ、今言った命のバトンというのは、決して血のつながりだけが全てではないというふうに思います。中には、地震や津波や戦争や貧困や病気や事故や事件、いろんな形で亡くなる方がいます。幼くして亡くなる子どももいるし、生まれてきてすぐに亡くなる子どもさんもいるし、お母さんのおなかの中で亡くなる赤ちゃんもいます。自分が出会った数々の人たちというのは、血のつながりではないけれども、その残る人たちに自分の人生の物語を、命のかけらを、仕事や生きざまをまた残る人に手渡していった、そんな姿も自分は写真に撮らせてもらった気がしています。

なので、ここからは、そのいろんな人たちの命のバトン、つないでいったバトン、つなげなかったバトンも含めて、皆さんと一緒に、私の人相の悪い顔ではなくて、いろんな方々の写真を見ていきたいと思います。

〔13時 43 分～14 時 18 分　写真講演〕

標 題

『レンズを通して見つめ続けた「生」「老」「病」「死」』

～限りがあるからみんなでつなぐ～

紹介された写真（一部抜粋）

・釜ヶ崎地域（大阪市西成区）の路上生活者の様子

・ガンジス川のほとり、バラナシ（インド）に集う人々の様子

・君ヶ畑（東近江市永源寺）での在宅看取りの様子

・東日本大震災の被災地の様子

○事務局（滋賀県企画調整課　山田）

國森さん、ありがとうございました。

それでは、ここから出演者の皆様に議論をお願いしたいと思います。

聴講者の皆様におかれましては、随時コメントをお出しいただければと思います。

ここからの進行は、ファシリテーターの上田さんにお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。

國森さん、ありがとうございました。

それでは、このお話を受けまして、まず委員の皆様方と、続いて会場の皆様と進めていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

早速ですが、今の國森さんのお話を聞かれまして、委員の皆さんがそれぞれどういうご感想をお持ちになったか、順に聞いていきたいと思います。打本さん、ミウラさん、楠神さん、越智さん、藤井さん、そして三日月さんということでいきたいと思いますので、よろしくお願いいたします

では、打本さんから。

○打本　弘祐さん

打本でございます。

國森さん、本当にありがとうございました。

途中、私も涙があふれるような場面もありましたし、懐かしい場所も幾つかございました。バラナシであったり、また西成のほうも。実は、恥ずかしい話でも何でもないと思うんですけれども、私、この職に就く前にいろいろなものを失いまして行き場がなくなったんですね。そのときに私を支えてくれたのが西成にいる先輩でした。大学の教員になる前、半年ほど間借りをしてあそこで生活をしていたんですね。釜ヶ崎も近かったので、たくさんの方々に会いました。寝て

いると思ってたんですけど、亡くなっている方にも実際に会いました。

　でも、大変なんだけれども、そこでたくましく生きている方々にもいっぱい出会ったんですね。若い者がうろうろしているので声をかけてくれるおっちゃんがいたりとか、そういうあたたかさ、また幼い子どもたちがそこで一生懸命生きている姿に私自身が勇気づけられて、私はあの辺りを「自分の中での再生の地」なんて言っているんです。とても大変な地域ではあるけれども、人のあたたかさをものすごく感じさせる、生きる力をいただいた地域でありました。だから、今日見るたびにちょっと。あの頃はつらかったんですけれども、あの頃があったからこそ今があるというのがあります。

　そして、國森さんの写真の看取りの中でも、悲しいけれどもあたたかい死、またそこには感謝があるというのをたくさんいただきましたけど、私の教えの中にある親鸞さんという方、850 年前に生まれた方ですが、その方の主著の中に師匠の法然さんという方の死を悼みながら思い出を書いている箇所がある。そこで私が一番好きなのは「悲喜の涙をおさえて」という言葉があるんですね。亡くなった法然さんという方を思うと、悲しみがすごく湧いてくる。ですけれども、いただいたことへの感謝であったり、出会いのうれしさ、そこが喜びとなって涙になってくる。でも、涙を流してしまうと、筆で書いていますので、当然涙が伝って墨がにじんでしまうから、それを一生懸命抑えて、私は今ここで思い出を書かせていただいていると。まさに命のバトンみたいなものを書いているんだと。今日の國森さんの言葉を借りればですけれども、そうした命がつながっているんだということを喜んでいるという、そのことを今とても思い出しました。悲しいけれども、人の死というのはどこかであたたかいものも感じさせてくれる。そこには命のつながりであったり、今私が生きていることというのはそうした死者からの贈物であったり、そうしたつながりというのを非常に感じさせていただいた講演でありました。ありがとうございました。

〇上田　洋平さん

　悲喜こもごもの「悲喜の涙」ですね。ありがとうございます。

　では、ミウラさん、お願いします。

〇ミウラ　ユウさん

ミウラです。よろしくお願いします。

國森さん、ありがとうございました。ちょっと受け取るものが多くて、私の語彙力で感想を言えるかどうかちょっと難しいんですけれども、まず最初に、子どもたちと数を数えると。100 万人ぐらい先祖がいるんだというのを聞いて、想像していたよりも人数が多く、「100 万人って？」となって、ちょっとリアルと乖離しちゃったんですけれども、私自身、長い間不妊治療をして子どもを得たんですが、私は次の世代にバトンを渡せないんじゃないかと思ったんですよ。子どもを残せない。それはすごくプレッシャーで、駄目な人間だなと、そういうふうに感じたときがあったんです。でも、不妊治療の一番最後に「もうお金も尽きちゃうし、これで諦めよう」と思ったときに息子を授かりました。

その生まれてきた息子は障害があって、重い心臓病を持って生まれてきました。生まれてから3度の心臓手術と、あと医療事故に遭ったので脳の手術も何度か経験したんですけれども、その息子を連れて先ほど写真に出てきた釜ヶ崎へ、西成へご縁があって行ったんですね。そしたら、あの当時で息子は 13 歳ぐらいだったと思うんですけど、車椅子に乗っている息子を見て、おじさんたちが「兄ちゃん、頑張りや」と言ってお菓子とか小銭とかを膝に乗せるんですよ。自分の中に確実に差別があったなと思ったんですよ。そういうところで暮らしている人は、何ていうか、元気もなくて、社会から外れて、働いてもいない、そういう人たちだと思ってたんです。「思ってた」というのが自分で分かったんですけど、行ってみると、すごい楽しくて。

なぜそこに行ったかというと、釜ヶ崎で、年に1回、ロックフェスがあるんですよ。息子共々、私たちはすごく音楽が好きで、そのロックフェスを聞きに行ったんですけど、もうそれはそれは、今までいろんなライブに行きましたけど、何ていうか、人間の底力があふれる、「ああ、生きててよかったな」とか「生きていきたいな」と思うライブだったんですよ。西成に行ってなかったら多分そういうものを感じられてなかったし、やっぱり知るということは大事だなと。あと、自分が体験するということは大事だなと思いました。

あと、地域で看取るということ、地域で最期まで生きたいということ。私の母も高齢になってきて、京都の西陣という地域に住んでいるんですけど、近所には古くからのお友達がいて、孤独にならないというか、お話ができる。最期までそこにいたいとやっぱり母も言っているんですけど、子ども・孫世代の現実生活がすごく大変で、引き取ることもできなかったら京都に行ってやることもできないし、応援ができないんですよね。そこに最期までいたいという母の願いに協力し

たり、応援することが難しいと。そしたら、母が私たちを産んでくれて、それで私が存在しているのに母の願いをかなえられないという、ここでもまた「私は駄目な人間だな」というプレッシャーがのしかかってくるんです。でも、私は自分の子どものために働いたり、自分の今の生活をしないと駄目なので、母の思うことをかなえてやれるかどうかというと、結構難しくて。だから、「これはもう現実問題あるぞ」というのをちゃんと自分で思ったり、そういうことがかなえられる社会に変えていかないと駄目だなと。個人が駄目なのではなくて、制度がうまくいってなかったり、社会背景がそうさせてくれないみたいなことがあるのに、自分の責任というか、そこをすごく責めてしまうところがあるので、そこは考えないと駄目だなと思いました。

震災に関しては、私は神戸なので、身近なものと言うとあれですけれども、すごくそういうことを感じて生きてきました。やっぱり残された人たちは誰にも怒りをぶつけられない状態で死と向き合わないと駄目というのがあって、「おまえが悪い」とか、やっつけられる相手がいたらいいんですけど、何しろ自然相手なので怒りがどこにも行かないと。でも、長い時間をかけてそこと向き合って乗り越えていく姿もたくさん見てきたので、弱いけれども強いなと。ちょっと言い表し方が本当に稚拙なんですけど、人はみんな総じてそれなりに弱いと思ってます。根っから強い人というのは本当にごく一部で、みんな弱いんですよ。でも、つながりや体験みたいなものを通して乗り越えたりとか、強くなる方法はこうしてあるんだなと。別に頑張らなくても自然にそれができていたりすることもあるので、そういう希望を失わないように、そして皆が孤独にならないように、何かそういうふうにしていきたいなというのを改めて思いました。

ありがとうございました。

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。

不妊治療のときに、次の世代にバトンを渡せないんじゃないか、駄目なんじゃないか、そういう思いを持たれたと。しかし、國森さんがおっしゃっていた、血のつながりだけがつながりじゃない。國森さんはそれを、東近江の永源寺とか、いろんなところで実感されたんだと思います。

またしゃべり過ぎるなと怒られるかもしれませんが、重要なことなので少しだけ。

この懇話会をやっておりますと、在宅看取りのすばらしさとか美しさ、そういうことがよく出てきます。それは本当にあたたかいし、すばらしい。尊厳に満ちた厳かな場。しかし、それを我々が称揚し過ぎるあまり、

それができない人にとっては、「では、私は駄目なのか」と、こういうメッセージを発してしまう恐れもあるというふうに思うんですね。

ミウラさんが感じられた「不妊で次の世代にバトンを渡せないんじゃないか。だから駄目なんじゃないか」あるいは「現実、在宅看取りができない。親不幸な、駄目な子なんじゃないか」、決してそういうふうに思う必要はない。むしろ、そう思ってしまうようなマインドセットといいますか、自己責任とか、助けを借りられない、迷惑をかけられない、そういう価値観をそろそろ変換していこうというのがこの懇話会の中でぐるぐるぐるぐる話しながら出てきたことかなと。そこは共有しておきたいなと思います。まさに血のつながりだけがつながりではない。ある意味、地域の「地」のつながりの中で死や生と向き合っていく。

そうしたチームにも加わっていらっしゃる楠神さんにコメントをいただきたいと思います。一番身近で國森さんの活動をふだんから見ていらっしゃると思うんですが。よろしくお願いします。

○楠神　渉さん

楠神です。

國森さん、今日はありがとうございます。東近江地区で三方よし研究会の関わりだとか地域づくりの中での國森さんと一緒に活動させてもらったり、またお話も聞かせてもらって、今日のこの企画が決まったときに久々に会えることをとてもうれしく思っておりました。

今日、國森さんのお話を改めて聞かせてもらう中で、インドのガンジス川のお話が出てきました。お亡くなりになった方は、灰になって命の源に帰るんだと。ただ、小さな赤ちゃんや妊婦さんなんかは、もう一度やり直せるようにご遺体のままで川の中央で、もう一度再起できるチャンスがあるんだと。その川では沐浴をしたり洗濯をしたり、そんなふだんの生活の延長線上に、國森さんは「生活の中に死がある」と言いましたけど、私も生活の延長線上に死がある国や地域

というのはすばらしいなと思って見ておりました。

では、日本はどうなのかなと。介護保険ができたとき、10 年前、20 年前はどうかなと思うと、今、必ずしもふだんの生活の延長線上に死というものがないことも多いなというふうにケアマネをして感じております。死が特別なものであって、あってはならないものみたいなことにとられることもまだまだ多いような気がします。

私がこの死生懇話会で何度か「看取りの写真集があるんです」という話をしてたのは、実は國森さんの写真集のお話だったんですけれども、それをこの話を何度もして申し訳ないんですけども、初任者研修という介護を初めてやろうという方が学ばれる研修会の場で私はいつも國森さんの写真集をお持ちして「どうぞ休憩中に見てくださいね」というふうに言っております。ちょっと最近ましになってきたんですけど、今から 10 年前ぐらいは、初任者研修のときにそれを見てもらうと、「あれっ、これ、事件があります。これ、犯罪じゃないですか。警察とかいいんですか。家で死んでしまっていいんですか」みたいな、そんなことを真顔で言われるんですね。しかも、もうすぐ介護の現場でチームとして看取りにも関わろうという人たちがそういうふうにおっしゃられる。それは、ある意味、日本の現実だなというふうに受け止めておりました。

そんな中で、今日、國森さんのご紹介にもあった永源寺の君ヶ畑のほうですね。ナミおばあちゃんのお話もありましたけども、在宅で最期を迎えることもできるんだよ、お孫さんとともに迎えることもできるんだよという活動が広まってきました。介護保険ができた当初は、二十二、三年前は、最期の場所にどこを選ぶのか、そういう選択肢が随分狭かったように思います。最期、病院で命がもうわずかと分かった場合でも、その選択肢がないままということがありましたけども、今はどうするかを選べるようになってきたなと。このまま一分一秒でも長く命を守るために治療を継続するということも選ぶことができるし、例えば、ご自宅に帰るのは難しいけども、施設なんかに入って、ケアは施設の職員さんにしてもらいながら、家族さんは通いながら最期を迎える、あるいは、今日のナミおばあちゃんのように、ご自宅に帰って地域の方と一緒に最期を迎える、そんなことが選べるようになってきたのは少しうれしいなと思っております。

コロナ禍でこの3年間ぐらいは、病院に入院してしまうと、なかなか家族さんがお会いできないみたいな状況もありましたけども、今、多くの病院、まあ、多くと言うと言い過ぎかもしれませんが、一定数の病院では、最期、病院で看取りとなった場合は、コロナ

禍であっても病室を開放されて、ぎりぎりまでいてくださっていいですよ、何時でも入ってくださっていいですよと。だから、さっきのナミおばあさんの写真みたいな風景が病室の中であるということも、私、何度もお見かけしました。

私もケアマネなのでよく病室にも行かせてもらって、お孫さんが、病院の先生は怒るかもしれませんが、ベッドに上って、おばあちゃんの横で寝転んだりしているんですよね。そういうふだんの生活の延長線の中――それは場所が違ってもいいと思うんですね。家でもいいし、施設でもいいし、病院でもいい。だけど、死というものがふだんの生活の延長線上の中にあると思ったときに、決してつらいだけのことではなくて、最期の大切なときを一緒に過ごせる、そういうことも選べるんだよということがみんなの共通認識の中に広まってくればいいなというふうに思って聞いておりました。

あと、國森さんのお話の中に、病気が治らなくても、幸せが大きいと病気が相対的に小さくなるんだという話がありました。私もケアマネをしてて本当にそう思います。今、不治の病とか、治らない病気も多い。もしくは、あえて治療しないという選択肢もありますけど、「じゃあ、それが不幸か」というと、本当にそうじゃないなと、私は横で付き添っていて思います。お孫さんや地域の方との関わりで笑顔が増えてくると、「あれっ、この人、本当に病気なのかな」と思うぐらい元気になられる方が本当にいらっしゃる。さっきのように介護度が軽くなりましたという方もたくさんいました。病気が治っても、関わりが薄かったり、気持ちが前向きにならなかったら、介護度というのはよくなりません。ただ、周りの関わりとか、いろんな関係性の中で、その人が「幸せだなあ」とか「今、ここにいていいんだよなあ」と思えたときに人は元気になれるのかなと。そういう普通の中に死が延長線上にあるようにみんなで思える社会になったらいいなと思って聞いておりました。

國森さん、今日は、貴重な話、ありがとうございます。

○上田　洋平さん

楠神さん、ありがとうございました。

介護の現場においてすら、家で人が死んでいくということを事件のように思う人がいるということになっている。ある意味、その「事件」が毎日起こる現場で、委員みなさんの中で最も死を日常としていらっしゃる医師という仕事、まあ、こんな言い方が合っているかどうか分からないですが、越智さんに伺いたいと思います。

それから、幸せを大きくすることで病の苦を小さくしていくことができるという話が

ありました。あるいは、写真の中のタスクちゃんを見ていると、一番の薬は人なんじゃないか。あるいは、明日があるんだ、待ち遠しい明日がある、それが薬なんじゃないか、というようなことを考えるのですが、お医者さんとしてはどうお考えになるのかというところも聞いてみたい。越智さん、よろしくお願いします。

○越智　眞一さん

國森さん、どうもありがとうございました。

画像だけを拝見していますと、人の生命に対する熱い思いとジャーナリストとしての冷静な判断、そういうのを感じさせていただいて、淡々と捉えられている画面かなというふうに思って見ておりました。

我々も似たようなことで、病気である、亡くなられる、それを淡々と捉えている面と、亡くなられていくんだな、何とか助けたかったなということで心が痛む、その熱い心とのはざまで揺れ動くというのが、医者がずっと経験していくことであろうかというふうに思います。

誤解のないように申し上げますが、私は別に死に直面しているわけではなくて、私の患者さんのほとんどは生きておられるということを言っておきます。

それで、ヒポクラテスの言葉に、医者に対するいさめといいましょうか、「diseased person」というのと「person with disease」というふうに言い分けているんです。「病める人」と「病を持っている人」というふうなことですね。病気というもの、何らかの病気を持つんだけれども、それに打ちひしがれている人をつくるなと。diseased person をつくるなと。patient with disease、病とともにある人たちをつくって、その人たちの治療に当たれというような教えを残しています。

先ほどの「何が一番のお薬か」という話になるんですけれども、病気があると、必ず精神的に鬱になります。新たなことができない。「これをやりたいんだけど、病気だからやめとこうか」と、そういう鬱というのが出てきます。でも、「この子のために頑張ろう」「あの子が結婚するまで頑張ろう」というと、そういうことがなくて新しいことに手を出そうとしますから、鬱の状態から解き放たれていく。そこにどういう物質が絡むかは分かりま

せんが、diseased person から patient with disease になる。そういうような手続でよいほうに向かっていく。だから、家族の方が一番のお薬であろうというふうに言います。

施設等々で見ておりますと、やはり、家族の方が面会に見えると、目に見えてよくなります。変な言い方で申し訳ないんですけど、「狼少年」と僕は自嘲しているんですけれども、「入居者のAというおばあちゃんは、もう食べはらへんし、2週間もつかそこらですよ」と言うと、これはいかんというので面会に来られます。そして、その頻度も増えてくると、めきめきとよくなって食べるようになって、完全に僕は狼少年。けど、狼少年でいいと思っているんですよね。そういうことがきっかけで持ち直される方がいる。

一方では、先日も 100 歳前後の大往生という話をさせていただきましたけれども、ずっとお話をしておられる、そしてお食事もしておられた方が、ぱたっとお食事を取らなくなる。どんなにお勧めしても食べられない。食堂には車椅子に乗せてもらって出てきて、にこやかにみんなと話をしている。けど、食べない。水分だけ取っておられたりというので、3か月ぐらいでしょうか、会いたい人と会って旅立っていかれる。そうすると、見送られる方も、満足という言い方はおかしいんですが、非常に穏やかに送られますし、亡くなっていく方も非常に満足な顔をして亡くなっていかれる。そういうのを目の当たりにすると、こういう看取りの仕方――医療としては何もしてないんですよ。けれども、この方を苦しませずに旅立っていただけたなと。ご家族の方も、当然悲しみはありますが、悔いを残さない見送りというものができたんじゃないかなというふうには思っております。

今申し上げたのは、介護できる死といいましょうか、見送ることのできる死ですよね。あとは、災害等の看取りがない死というものは、これはもう我々は手が出しようがない。そういうことのない世の中を祈るのみだというふうに思っております。

以上です。

○上田　洋平さん

ありがとうございます。

それでは、藤井さん。死の教育という話も藤井さんからはいつも出していただいています。まさに、今日の國森さんの写真を学校の中で子どもたちが見ながら学ぶということもあると思います。よろしくお願いします。

○藤井　美和さん

　國森さん、ありがとうございました。本当に私も胸がいっぱいで、映像を見ながら、それこそ受け止めることができるのか･･･みたいな、自分自身が問われるような感じがしました。写真をたくさん見せていただいたんですけれども、写真を見せていただいたというよりは國森さんの関わりを見せていただいたような気がしています。國森さんがカメラを通して多くの方に関わってこられたというその姿がまた、うまく言葉にできないですけれども、どんな目でカメラを通してこの方々を見てこられたのかなというところに、本当に感動いたしました。ありがとうございました。

　一つ、見せていただいて思ったのは関わりですね。それこそ國森さんが関わっておられたということも大きなことですけれども、人の「生き死に」に人が関わるということの重さといいますか、それは家族とか地域だけではなくて、例えばそこで偶然出会った人でもそうだと思うんです。人は、やはり、人に関わるということを問われているんじゃないかと思いました。関わらずにいれば荷物は背負わなくていいわけですから、多くの人は関わらずに済ませることができると思うんですね。私たちがいのちを語るとき、生と死を語るとき、それは悲しいかな、やっぱり自分の持っている知識や自分が持っている経験をもとにしか語れないと思うんですね、分からないことだから。そうすると、自分の持っている知識あるいは経験がいかに小さいかということを知らない限り、「これはこういうものだよ」なんていうことを平気で言ってしまう自分がいるということになると思います。

　そういう意味で、私たちは、ふだん日常生活で生と死を語るとき、自分が出会わない人の死を、出会わずして語るということには大きな責任が伴うと思うんですね。いろんなところに出かけていって、日常生活では出会わない人に出会ってみて、そこで初めて「人が生きるということはこういうことなのか。死ぬということはこういうことなのか」ということを、私たちは、教えられたり、学んでいくのだと思います。地域であっても家族であっても、どこであっても「関わる自分でいられるのか」ということ――それを一つの形としていろいろな死、今見せてい

ただいたようなものが――問いかけてくるという意味はすごく大きいと思いました。

私も「死生学」、「デスエデュケーション」という授業を20年以上しているのですが、講義だけではなく、学生を現場に連れていくんです。コロナのときはちょっとできませんでしたけれども、釜ヶ崎にも連れていくと、自分が語ってきた語りの中に大きな偏見があったことに気づいたりします。それは人が説得して理解できるものではなくて、行ってみて、その方々とお話してみて、「ああ、そうなのか」と、自分自身の無知さを突きつけられて変わっていく。そういうことが、もう何度もありました。それは路上生活の方だけじゃなくて、全てにおいてそうだと思います。「自己責任」という言葉が使われた途端に、自己責任というものはその人の責任なわけなので、自己責任イコール、「はい、私は関わりませんよ」という宣言になると思うんですよね。そうなってしまわないように、「関われるか」という問いに向き合うには、その現場に行ってみるとか、あるいはこのような映像を見せていただくとか、私たちの身近なものとして「“いのち”がここにあるんだ」というところと対面すると言うんですかね、実感するということが、すごく大きなことだなと思いました。

関わりというのは、常に「こうしましょう」という形ではなくて、問われて自分の中から湧き出ないと、やっぱり関われない。最後に國森さんがおっしゃってましたけど、子どもさんが一人助かった後、ご家族が亡くなっていることが分かったときに、「私はまた行かなければならないと思った」という、やっぱり、出会ったことによって、関わりを自らに問われるというところが、いのちを語るところの原点ではないかと思いました。

本当に心に響くお話と映像、ありがとうございました。

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。

國森さんの関わりを見たと。その話からのキーワード、「関わり」という言葉が出てきました。関わる自分でいられるのか。

いわゆる排除アートというのは、まさに町ぐるみで関わらなくてもいいようなデザインの町にしていくという、こういうことかもしれません。そんなことも思いました。

この後、三日月さんにコメントをいただいて休憩に入りますが、三日月さん、前回の美術館トークイベントの中で、人々が絵を見ながら考えを語るという対話型鑑賞というような話が出てきましたね。まさに、今日は國森さんの写真を見ながら対話型の鑑賞を実践しているような気もいたします。最期は関わりが問われている、関わる自分でいられるか。これは一人一人の問いだけで

はなくて、やっぱり社会への問いでもあるかと思います。そんなことも含めて、コメントをお願いします。

〇三日月　大造

國森さん、ありがとうございました。また、その後の委員の皆さんのお話を聞いていて、うまく言えないんですけど、今までにない感情とか、あと、この死生懇話会をやる意味とか、そういうものを考えてます。

さっきミウラさんもおっしゃったけど、最初に「数を数えてみよう」と問いかけるという、あそこでまずどーんときましたよね。「そうか」と。私もそうですけど、皆さんもそうですけど、一人一人が生きていることの意味とか、これだけ多くの人たちのつながりがなかったら今自分がいないんだということの問いかけ、それは何も血のつながりだけではないということから見る「生きていること」と「死ぬこと」、そして今も藤井さんがおっしゃった「そういうことに関わろうとしますか」「関わりますか」という問いかけ。これは、今日國森さんからいただいた本質的な投げかけだったと思います。

私が今コメントを求められて言おうと思っているのが二、三点あって、1つは、数じゃなくて、やっぱり一人一人を見ないといけないということ。ついつい行政とか知事というのは「何人生まれて何人亡くなった」とか「何人コロナにかかられた」という数を見ちゃうんですけど、やっぱり一人一人。

あと、現場と現実。現場と現実をいかに見て、そこから何か制度をつくったり、制度がなければどうしたらいいかというのを当事者や周りの人たちと一緒に考えるということが大事なんだなというのを國森さんのお話や問いかけ、また写真の中から感じました。

というのと、そういう中にあっても「どうしたいのか」「どういたいのか」というのをやっぱり大事にしたいなということ。

最後は、12 年前の東日本大震災での衝撃の現場。阪神淡路大震災でもありました。私も当時駅員をしていて新長田の支援勤務をしたんですが、焼け野原になった町の真ん中に仮の駅舎を建てて、そこで改札員をしていたときの臭いとか遺体の一部を持って帰る人のすごい現場を思い出してちょっと胸が苦しくなったようなところもあるんですけど、この悠久・雄大な、あたたかいけど厳しい自然の中で一緒に生きているということの意味ですよね。つらい現実なんだけど、そうなったときに初めて人間と人間が助け合えるというか、だからこそ「生きているって尊いし、大事にしようね」と損得勘定なく言い合えるのが自然の中で生きる意味なのかなというのを改めて感じました。

私、いろんな公務や会議に出るんですけ

ど、筋書きや「知事、こう言ってください」という原稿なしに臨む会はこの会だけなんです（笑）。いや、だからいいというか、だから素の人間になれるというか、皆さんにとって死生懇話会とか生や死を考えるひとときがそういう瞬間になればもっといいのかなということも感じました。

以上です。

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。

委員の皆さんに一通りコメントをいただきました。本当にまだまだ酌み尽くせないものがいっぱい、僕もいろんなことを思いましたが、ここで少し休憩を入れさせていただきたいと思います。休憩を入れまして、その後、皆さんからのご意見も頂戴しながら、また議論をしていきたいと思います。じゃあ、よろしくお願いします。

○事務局（滋賀県企画調整課　山田）

それでは、事前に想定してた時間を少しだけ押してますので5分間の休憩とさせていただいて、15 時から再開させていただきます。

また、冒頭チャットができない設定になっていたみたいでして、今はもうチャットが打てるようになってますので、この時間を使ってオンラインで聴講の方もコメントをぜひお願いいたします。また、会場の方はスタッフが回収に参りますので、よろしくお願いいたします。

では、休憩に入らせていただきます。

〔14時56分　休憩〕

〔15時02分　再開〕

○事務局（滋賀県企画調整課　山田）

お待たせいたしました。それでは再開させていただきます。随時コメントもチャットで送っていただいて結構ですので、よろしくお願いいたします。

では、後半も引き続き上田先生に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。

もうあっという間ですね。後半もよろしくお願いいたします。

ここからは、視聴者の方、会場の皆さんの意見も拾いながら話していきます。もとより、毎回ですが、この懇話会はまとめるなと知事からも言われておりますので言いっ放しで終わるかもしれません。それにしても、今日は、これまでの懇話会やリレートークで提起されたテーマや伏線を回収するような議論になっているような気がいたします。

さあ、後半は皆さんの意見を拝見していくんですが、その前に、前半で皆さんから一言ずついただきましたことを受けて國森さんから少しコメントをいただきたいと思います。お願いします。

○國森　康弘さん

皆様の一言一言がすごく自分の心にも重く響くコメントをありがとうございました。

越智さんもおっしゃられたように、医者をしていて救えない命があったりして、その限界を感じると。自分も、写真を撮る相手が亡くなっていくとか亡くなっているとか、限界を感じながら常にいるんですけれども、同時に考えないといけないのは、ミウラさんがおっしゃったように、自分たちは弱い存在であって、何でも完璧になんかできないし、

100 点というものがあるわけもないし、多分、どんな死に方、身じまい方をしたとしてもきっと後悔も残るだろうし、「もっとあのときああしとけばよかった」という思いも残るだろうし、「これでよかった」「完全によかった」と思えるようなことはきっとないと思うんです。

そしてまた、不慮の死というのはなおさらつらい。死に目に会えなかったり、別れも言えない、感謝も交わせない中で亡くなったりとか、すごくつらい部分もとても多いと思います。そんなときにどういうふうにしたらいいのか、正直、自分にも分かりません。

ただ、自分が、事故や震災で亡くなった友人とか病気で亡くなった身内、それから戦争で殺された同業者とか、目の前で、カメラの前で亡くなっていく人たちを見たときに自分に何ができるかというのは、その人がここまで一生懸命生きてきた生きざまをしっかりと世に残すために記録するということと、そして自分の胸の中に、心の中に刻むということと、日々その方々を思い出しながら、思い返しながら、心の中で語りかけながら、そうやってその都度また刻んでいくというか、一人の人生も自分は背負えないと思います。ただ、思い出しながら、語らいながら刻んでいくということを自分はしていて、そして自分もそのように不慮の死を遂げることもあるでしょうし、明日あるいは今この次の瞬間に死んでいるかもしれないし、1年後に死んでいるかもしれない。ただ、自分はいつ死ぬか分からない中で今生きていることをすごく大事にしたいし、感謝をしたいし、朝を迎えられることに感謝をしたいし、同時にそうやって不条理な死を遂げた人のことも思いながら、戦争も含めて不慮の死がなくなるように自分は仕事を続けていきたいと思っていて、その仕事の一つが皆さんに見てもらったような写真でもあるんだろうというふうに思っています。

一旦、以上です。

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。

そうですね。繰り返しますが、我々は何もかも 100 点でできるわけではない。そして、ここでも、あたたかな死とか、いろいろな理想的な死を話題にしたりしますけれども、一方でそのとおりにはいかない不慮の死というものもある。それこそ、そういう不慮の死をどう社会の皆でなくしていくのか、その苦しみを軽減していくのかということが問われているのかなと思いますね。死に優劣をつけたり、命の価値を値踏みすること、これに対して我々はここでずっと「それはいけない」ということを言ってきた。在宅看取りはよい死に方、不慮の死は悪い死に方というように、死に方に優劣があるというような誤

解を生まないように丁寧に議論していかないといけないというようなことも改めて感じながら聞いておりました。

戦争もあって災害もあって、厳しい死生の現実に生きていらっしゃる、そういう状況の中で、こういう懇話会をしながら、ぬくぬくとこの安全な場所で死生を語っている、そのことの意味というのは何なんだろうかといつも自問自答しています。こんなことを言うと、この場の意味が崩れてしまうかもしれないんですけど、実はそういうことも委員の皆さんは同じように感じているのではないかなと。この辺もまた後ほど聞いてみたいところです。

さあ、こちらのほうに皆さんからのいろいろなコメントをいただいております。全部は拾い切れないかもしれませんし、全部を委員の皆さんに振れるかどうかも分かりませんが、できるだけ拾っていきたいと思います。

「今日はありがとうございます。藤井さんの感想でもありましたが、日常では出会わない人、また日常生活では感じることができない、この死生懇話会は、心にグッとくるものが多くありました。」と、こういう感想をいただいています。

「そこに生きるひとたちの物語が見えてくる写真に心が動く感じがしました。ひとにはみんな物語がある。そのことをかみしめたいと思いました。」。

そして、「國森さんへ」ということで、「亡くなるおばあちゃんの横に産れたばかりのひ孫が並んでいる。二人ともとても幸せそう。命をつながれたその子は生涯大切なものもひきつがれたように思います。それは“二人称の死”というところから生れてくる思いと思います。」と。しかし、「昨今、多くの人が亡くなっているにもかかわらず、それが“三人称の死”であるが故に、切実感がない。」というようなコメントですね。二人称の死、三人称の死、あるいは一人称の死もある。「國森さんは兵士の死も多く撮っておられ、それが三人称の死ではなく、“二人称の死”をレンズを通して視ておられるのではないか。私たちは日常の三人称の死の中にいて、その様な気持で二人称として捉え得るコツ（心）はどういうところから生れてくるのか、お聞せ下さい。」ということで、一人称、二人称というのは藤井さんもおっしゃってくださっていましたが、まず國森さん、このコメントに対していかがですか。

○國森　康弘さん

自分は、二人称、三人称というのをあんまり意識したことはなかったんです。自分が意識しているのは、目の前にいる人の命のバトンリレーというものを思いながら写真を撮っているということが多くて、「この目の

前の人には歴史があって、その歴史がここでこれからどうなるんだろう」「もしここでこの子が亡くなったら、この子のバトンをどんなふうに誰が受け取るんだろう」ということを考えながら撮る。時々、戦争の地でも、あまりに悲惨過ぎてシャッターを押さない、押せないこともあるんですが、そのときに背中を押したのはその犠牲になっている子どもさんの親だったり身内だったりして、「おまえが今このシャッターを押さなかったら、この子の存在はどうなるんだ。おまえが押して、この子の存在を伝えてほしいし、そのことによってこの不条理な戦争を止める力になってくれ」というふうに言われることもありました。それでシャッターを押すこともありました。

そういった意味では、目の前の人の命のバトンリレーとか歴史を自分なりに想像しながら、そしてその先を思いながらシャッターを切ってます。

○上田　洋平さん

個々の、一人一人の死ということもありますが、その命がつながれていく流れとか歴史というものを意識しているというところかしら。

一人称、二人称、三人称というようなことが出てきましたが、藤井先生にも少しだけコメントいただけたらと思います。

○藤井　美和さん

三人称というのは「一般的に語る（語られる）死」ということで、今のコメントの方も書いておられると思います。数字や現象だけ捉えると、三人称となってしまいます。今までのお話でも、いろんな方がおっしゃっていましたけれども、いのちが個別であるというか、一人一人自分のいのちがあって、自分が所有者だというふうになってしまうと、「一人称」と、「二人、称三人称」は、厳然と分かれてしまうと思うんですね。「あなたのもの。私のもの。（それぞれが所有するもの）だからノータッチです」となってしまう。二人称の視点が生まれるのは、「いのちを共有している」という視点だと思うんですね。私たちは一緒に生きていて、あなたのいのちも私の一部というか、同じ共同体の中で生きているお互いのもの、という視点。もっと宗教的にいうと、そもそもいのちというのは自分たちがつくり出せないですよね。学生

に「いのちは、あるか」と聞くと、みんな「ある」と言うんですけど、「どこにあるの」と聞くと、みんなクエスチョンマークが飛びます。つまり、いのちは人間が操作して作り出せないものである以上、何かからいのちが与えられている。とすれば、私たちはみんな受け取る側だと思うんですね。その受け取る側というところに、いのちを受け取る同じ立場、いのちを共有できる者同士、ということがあると思うんですね。「私は私。あなたのことは知りません」ではなくて、「いのちすらも共有している」という視点が、二人称を生み出していくということの源にあるんじゃないかと思います。

ですから、私たちにはどうにもできない災害とか戦争で、人が亡くなっていく、その時、どうにもできないと思う限界のその先に、いのちのやって来たところがあって、その人たちは私たちの一部としてまたどこかに帰っていくんじゃないか・・・とか、そういう「見える、見えない」「私のもの、あなたのもの」という世界を超えたところに、いのちの本質みたいなものがある。そこからしか二人称という視点は生まれてこないんじゃないかなと、私はずっと考えています。

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。

たしか、この懇話会の中でも「死は最大の利他行為」というようなキーワードが出たことがありましたね。「看取る」という言葉も「取る」んですよね。送り出す人が取るんですよね。受け取るわけですね。というようなこともどこかで出てた。死というのは、ある意味、ギフトでもあるかもしれないと、そういうことを改めて思い出させていただきました。

さて、こちらですが、「教育の中で命の大切さを学ぶ機会として、助産師さんから、人の誕生の話などをきくことは多いが、死を学んだり語ることは少ないと伺った」ということですね。そして、これは多分ミウラさんがいいのかな、「若い子や人たちが受験や人生の階段での失敗（ととらえてしまう）や人間関係のつまずき（ととらえてしまう）の中で『消えてしまいたい』『何のために生きているかわからない』と切羽つまって話すことがある」と。「若い人、中年も、年配も切羽つまって死にたいと思いつめるまでに生きることや弱さや失敗をも含めた人間、自分をありのままにうけ入れられる社会の中で生や死、喜びや悲しみをありのままに語れる居場所（関係性）をつくりたい、ありたい」と。それから、「今、滋賀でどんな例があるか？」と。これは、知事に聞くよりも、むしろ楠神さんかな。時間があれば聞きたいと思いますが、まずはミウラさんに。

「『消えてしまいたい』『何のために生きて

いるかわからない』と切羽つまって話すことがある」、何に追い詰められているんだろうか。そして、実は子どもたちの自殺が過去最多。そんなこともある中で、今のこの方のコメントをどう受け止められましたか。

○ミウラ ユウさん

ちょうど昨日も今日もですけど、出かける前に――私は「いつでも電話してきていいよ」というふうに携帯番号を開放してまして、若い子たちが中心ですけど、年齢層は結構幅が広くて、10 代から 70 代ぐらいまでの人たちがしんどくなったら電話をしてくるんです。それは完全にボランティアで、ずっと 10 年ぐらい続けていることなんですけど、ちょうど昨日も今日も出がけに電話があって、それは 20 代の子と 10 代の子でしたけど、やっぱり親の思うようになれなかった自分とか――ちょうど受験が終わって、結局、親が希望していた学校には受からなかったとか、そういうことで生きることをもうやめたいと。生きていても、この先、親の希望に応えたり、社会の人と足並みをそろえてやっていくことができないと思うというふうに電話をしてきたんですけど、私はできなくていいと思っているんです。

私など、ここに座らせてもらっていますけど、何のタイトルも持ってない人間です。皆さん、お医者さんだったり、ご住職だったり、知事だったり、大学の教授だったり、いろんな肩書をお持ちですけど、私は本当に何もない一般の人間です。でも、多くの人がそうやって生きていくと思っているので、「できる必要はないんだ」と、それを必ず言うんです。言うんですけど、社会が求めていることはそれじゃないんですよ、やっぱり。もう幼稚園ぐらいの段階から同じ箱の中にみんなそろって入っていて、はみ出すようなことは許されないんですよ。同じようにできないと駄目。あと、同じようにできないと駄目と言っている割には比較・競争させるんですよ。その比較・競争の中で子どもたちがどういうことをやっているかというと、飛び出しすぎても、良過ぎてもハブられるし、下過ぎてもハブられるんですよ。みんな同じぐらいの、ちょっと真ん中よりいいところぐらいに全員がいるみたいなことをすごく求められるんですよ。それは同時にお母さんたち、お父さんたちも求められるんですよ。子ども

がそういうふうになれるように家庭でやらなくちゃ駄目とか、サポートしないと駄目とか、そういうことが生まれる。

だから、今、若い人たちが追い詰められて、自分が社会にとって役に立たないとか求められてないと思う原因はほとんどが社会側にあると思っているので、その子が悪いのでもないし、その家族が悪いのでも絶対ないんですよ。それを一生懸命声を大きくして言うしかないなと思って、私はもう地べたから、一番底辺ですけど、そこから一生懸命「そんなことは考えなくていい。命があればどうにかなることがほとんどだから、一緒に生きましょう」と。死にたいと言ってきたら、死にたい気持ちを受け取ります、一旦。「死にたいぐらいしんどいのは分かりました」と。「でも、私は死んでほしくないと願っている。でも、あなたが選ぶことだから、もしかしたら私が願っているようにはならないかもしれないけど、私は精いっぱいあなたと生きたいと思ってます」ということを必ず伝えて、今のところは大概の人たちがそれで一緒に生きる道を選んでくれているので、やっぱり孤独にしないことかなと思うんです。

誰か一人でも「しんどい」と言ったときに「そうやんな。そら、しんどいわな。生きていくの、めちゃくちゃ大変やな」と言って同意してくれる人がいれば、多分それを言った段階で気が済むんですよ。自分がしんどいということを「そうやんな」と言ってくれる、肯定してくれる人がいる、それはすごく大事なことだと思うので、もし若い人とか消えたいと思うような人と関わることがあったら、まずは消えたい気持ちを否定しないで肯定してやってほしいなと思います。そして、そこから一緒に「生きる道は何があるのか」というのを話せば、孤独を感じずに、追い詰められずにやっていけるんじゃないかなと思います。

でも、社会は非常に厳しいですので、それをやっぱり変えないと駄目だなと思ってます。考え方とか、いろいろ。

○上田　洋平さん

そうですね。これも繰り返し議論してきましたね。親の期待に応えられないとかね。しかし、親の世代の期待は、これからの時代、ひょっとしたら、もう古いのかもしれない。時代が変わる中でね。そういうこともちょっと考えましたね。

あるいは、私は学校にいますけれども、就職活動の中でエントリーシートを学生が書く。「あなたは何ができますか。どういう資格を持っていますか。あなた自身でそれを説明し、証明しなさい」「あなた一人で説明しなさい」、こういうことを我々は学生たち、若い人たちに無言のうちに強いているのかもしれないですね。そんなこともちょっ

と考えました。

あるいは、教育でも今までは一人で生きていける力ばっかりを教えてきたんじゃないかというようなことも考えたりしました。

それから、これはもう打本さんですね。「煩悩、本能があるから死が怖い。無ければ怖くないのではないか？　死が怖いと思うのは死が怖くないと思うより幸福なのだなぁと思う。日本で普通に生きられるのは幸福な事と改めて思う。」と。当然、打本さんは煩悩がないように思いますが、いかがでしょうか。

○打本　弘祐さん

仏教もいろんな考え方があるんですよね。なので私の宗派の話になっちゃうんですけれども、まずそもそも生と死というのを分けて考えてしまう私たちがいるなとは思ったんですよね。煩悩というのは、実は、一番根っこをたどっていくと、「分ける」というところから始まるんですよね。だから、本当は「生きている」ということは「死んでいっている」ということと同義だと思ってます。

不思議なことに私は縁があって、先ほどの西成の話でミウラさんとすごく話し込んでしまったんですけれども、生きていることは本当に幸せだなと思います。ただ、私は、今はこういう立場にいて大学で教えていますけれども、本当に就職難でした。「高学歴ワーキングプア」という言葉を知っている方もいらっしゃるかもしれませんけど、頑張って頑張って頑張っても報われない世代の教員であります。

まあ、そんなことはちょっと横に置いときますけれども、やはり生きていることそのものに幸せであるということ、どんな状況であっても決して見捨てられない存在が私であるということを私自身が伝えることが少しでも社会がよくなることじゃないかなと。

先ほど上田さんがおっしゃった、自己分析、就職のために「私はこれができる、これができる」ということを強いているんじゃないかという言葉は、本当に胸がいっぱいになって、身につまされるところもあります。

ただ、私が言っているのは――私は、坊さんとしても煩悩だらけですね。今、この場からも緊張で逃げ出したいぐらいの思いで話をしてますけれども、そんな私でもいていいんだと。自分のことを語っていい居場

所があるんだということを、この死生懇話会だからこそ、あえてしゃべらせていただいているところがあります。きっと皆さんの中にもそれぞれお一人お一人の物語があって、今ここに来ておられると思います。その中で死というものを考える。それは実は裏返しで、生死というのはもうワンセット、コインの裏表のようなものですから、生きるということを考えるきっかけを生んでいるんじゃないかなと。それが、少しずつですけれども、この社会というものを一人一人が考えて、どうしたら生きやすく、また豊かな社会になれるのかなというきっかけを考える場じゃないのかなと、改めて今思っているところです。

ちょっと答えになっていないところもたくさんあって申し訳ないんですけれども、煩悩があってもいいんだということを言わせていただければ思います。

○上田　洋平さん

煩悩の根っこは分けるという、そういうところにある。これも新たな気づきですね。

そういう意味で――これは越智さんかな。「今後想定される『多死社会』 死は世間に立ちあらわれるのか。多くなりつつも、排除、分断に至るのか。」と。死と生を分けていく分断に至るのか、気になりましたということですね。多死社会というものについて、越智さん、何か。

○越智　眞一さん

難しいですね。

先ほどヒンドゥー教のお話がありましたけれども、インドはすごい人口があって、経済的にも昔から非常に貧困ということからいくと、生と死が分け隔てなく、もう日常に死がある。死が延長線上にあるんではなくて、ごく隣にあるというような世界だったんじゃないかなと思うんです。

日本で言われている多死社会というのは、命長らえて、寿命を全うして亡くなられる方が増えていくという印象を捉えておられると思うので、先ほど僕が言ったインドのあれとはまた違ってくることですね。

これはちょっと誤解を招くのであれなんですけど、死にたいところで死にたいように、ご本人の望むところで望む死――当然、自爆死とか、そんなのはほかの人に迷惑がかかりますからいけませんけども、ある程度自分の死を悟ったら自分の好んだところで

一生を終えるというようなことが行政ないし地域、（地域という言葉はあんまり好きじゃないんですけども、）コミュニティでできる、そういうような世界ができればいいんじゃないかなというふうに思いますね。

そして、医者としては何ができるかというと、その方の苦しみがないようにということになると思います。

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。多死社会の中で死が普通のことになるのか、あるいは分断になるのか。

それから、「私達が子どもの頃は生活の中に死があり、そのことを通して介護することはできると感じていた。今、この社会で在宅介護、看取りの大切さはわかるし、自分も経験したが、『場所は違っていい』というお言葉にこれからの方向性が見えると感じた」と。場所が違っていいとおっしゃったのは楠神さんだと思いますけど、おうちじゃなくても、逆に言うと、病院の中に地域が、コミュニティがあってもいい、持ち込まれてもいいというようなこともあるのかもしれません。楠神さん、いかがですか。

○楠神　渉さん

そうですね。私が小さい頃は、おじいちゃんやおばあちゃんが家で亡くなるのは決して不思議なことではなくて、私もそういう経験の中で育ってきました。ただ、今はなかなかそういうふうに思えないこともあったり、家庭環境も核家族が増えていることもあって時計の針が昔のように戻るということはないと思うんですけども、國森さんが言われた、最期、命のバトンをつないでいくときに悲しみだけではなくて幸せがあるんだとしたら、その場所は今後多様であっていいと思いますし、今現在、本当に多様な場所があります。

私も、先月、一旦具合が悪くなって病院で入院された方が余命宣告をされたときに、その息子さん、お嫁さん、そしてお孫さんが、そのおじいちゃんは前から最期は家がいいと言っていたと。だけど、家は難しいんだと。障害をお持ちの方もいらっしゃったり、いろ

んな環境面で難しいと。だけど、もう少し家庭に近い環境で最期を迎えることができないんだろうかということで、チームで相談しましたら、その家の近くに高齢者向けの住宅があって、そこだったらお孫さんもいつでも自分の足で歩いていけると。家という環境は違うんだけども、そこで最期を過ごすことができないかということで急遽そこに転居して、最期をそこで迎えられた方がいらっしゃいました。私もその部屋へよく寄せてもらったんですけども、本当にあたたかいんですよね。施設ではあるんですけども、自宅のお部屋と環境は一緒。お孫さんがお菓子を食べながら、それにおじいちゃんがうなずいたりしていく。時にはベッドに上る。最期の最期のときも皆さんに囲まれて亡くなる。ご自宅では 24 時間難しいと感じるところもある中、そういった事例もありました。

ただ、それは決して珍しいことではなく、それが病院という場合もあるし、施設という場合もあるし、永源寺のようにご自宅という場合もある。実際の具体的な場所じゃなくて、最期に誰と関わって、どういうふうに最期を迎えたか。だから、お孫さんにとってもおじいちゃんの最期の姿を見れたことというのは大切な命をつながれているような気がして、私も、その場所にいると、悲しみはあるんですけども、それ以上に大きなあたたかみというのをすごく感じます。

先ほどの多死社会という中で、私のような医療福祉関係者、特に私が思っていることは、単に多死社会というだけではなくて、今、日本の人口というのは急速に減っていっているんですよね。2100 年には明治維新と一緒ぐらいの人口になってしまうんじゃないかという推計もあります。その中で、今の中学校2年生や3年生の方は 100 何歳ぐらいまで生きられると。半分がね。そうすると、2100 年ぐらいの高齢化率が 40%、つまり 65 歳以上の人が 40%いる社会。そういった社会になったときに、今と同じように在宅医療のチームで越智先生のような訪問診療をしてくれる先生がいて、看護師さんがいて、ケアできる介護職員さんが必ずしも全家庭を回れるかというと、そうではないんじゃないかなと。私は、20 年先とか、そういうことがあるんじゃないかなと思います。

そういう意味でいったら、ちょっと昔とは方法は違うんですけども、地域の皆さんと一緒に――それが家じゃなくてもいいんです。施設でもいいんですけど、医療福祉に頼るだけではなくて、もう少し地域の皆さんとやっていく。血のつながりがなくてもいいと思うんです。そういうことも選べるんだという社会を目指してやっていかないと、この多死社会を乗り越えていくことができないんじゃないかなというふうにちょっと思った

りもしております。

○上田　洋平さん

その死に方が選べるようになってくる、選択肢が出てくるということは、一方で経済的あるいはいろいろな事情で望む死が選択できないということもある。あるいは、医療福祉の資源、人が不足する中でできないと、こういうことになるおそれもあるわけですよね。だから、そういう中で、今、我々一人一人にこれからどうしていくのかということが問われている。そうでないと、今までのようなことだけではそれこそ分断が起こってしまうということになるのかもしれませんね。

はい、越智さん。

○越智　眞一さん

皆さん御存じかどうか分からないけど、今、在宅死と病院死――施設のデータはないんですけど、どちらが多いか、御存じでしょうか。会場の方、出演者の方で在宅死が多いと思われる方、手を挙げてみてください。では、病院死のほうが多いと思われる方。（聴講者挙手）はい、それで正解なんです。

もう一つは、いつ頃から病院死のほうが多くなったか。令和でしょうか、平成でしょうか。これは、昭和 51 年ぐらいから病院死が多くなっているという現状があるんです。その頃はまだ若い人が多くていけたんですけど、そこら辺が多死社会を迎えるに当たっての課題であるというのはご指摘のとおりだと思います。

以上です。

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。

さあ、だんだん一問一答みたいになっていくと思いますが、「死生について普段着で自由に語れる場があればよいと思います。公共施設で言えば、公民館や博物館、あるいは図書館ではなかろうか。とくに図書館には絵本から一般書（エッセイ、医学書、写真集）などがあり、自分の経験や対話する相手の経験だけではなくて、過去から繋がった人々の声が収められています。だから私は図書館デスカフェを2年前から図書館グループ学習室で春夏秋冬の年4回行っています。日本では死について語ることはタブー視に近いと思います。死のノーマライゼーションを進めたいです。」と、このような意見がありますね。

先ほど、ミウラさんへの質問の中にも、滋賀にどんな場所があるでしょうかと。それにちょっと答えてなかったなと思うんですが、ミウラさんの答えは多分一人一人が受け止めることで一人一人がその場所になれると

いう答えでもあったと思いますが、ここではまさに公共施設からそういうことができる場になっていくのもいいんじゃないかということですね。

この死生懇話会の前にアンケートをすると、公が死生について関わるべきではないという意見もたくさんあった。それは健全な反応だと思います。さきの戦争のことを思えば、公が個人の生き死に、死生観に介入するのはどうかという一方で、ミウラさんが関わっていらっしゃるような若い人たちがこの瞬間も自ら亡くなっていく。じゃあ、これはほっておけるのか。そういうことをみんなで考えようというのがこの懇話会の場ですが、どうですかね。これは三日月さんに振りましょうか。

○三日月　大造

さっきお話に出てきた多死社会とか人口減少、最近よく報道でも出てくる少子化とか、私らもよく使うことがあるんですけど、気をつけて使わないといけないなとつくづく思うんです。さっきも言いましたけど、全体を捉えて傾向を表現する言葉に、「いけないことじゃないか」「そうなったら嫌だな」という気持ちとか意図とか、そういうものが込められていて、それよりももっと一人一人を大事に思う視点とか言い方ができないかなと思います。行政は全然できてないんですけど。知事としても。だからこそ、國森さんのお話にも出てきたんですけど、一人一人の生きざま、物語を収めるというか、伝える、受け止める、それをまた命のバトンとして受け継いでいくという姿勢。そして、ミウラさんもやってはるし、藤井さんもやってはるんやけど――まあ、みんなやっているんですけど、そのことに「私が関わる」ということ、「みんなで関わる」ということがすごく大事だし、何かできるんじゃないかなと思い始めてきた。いろんな関わり方でいいと思うんです。そう思い始められたら、それがこの死生懇話会の一つの意味だったのかなと今思っています。

○上田　洋平さん

ありがとうございます。

もう一つあったんだ。こちらは知事の言葉を聞きたいと言われています。「マザーテレサ女史の言葉　日本に向けて“物足りて

心貧しき国かな!!”」と。一方で、西成の例がありましたが、我々のイメージと違って、心豊かな生活をしているというようなこともある。これについて、例えば心を豊かにするにはどうしたらいいのかというようなお問いかけですけれど、三日月さん、一言何か。

〇三日月　大造

　國森さんだったらどう言わはるかなと興味を持ってご質問を今聞いてたんですけど、私、コロナが広まったこの3年間、いろんな会合に行ったときに、「今日お会いできてうれしいです」「今お会いできてうれしいです」と、できるだけ顔を見て、目を見ながら言うようにすると、皆さんの反応がすごく違うんです。立場を超えてつながれるというか。だから、そういうことなのかなと思うんですけど。

〇上田　洋平さん

　ありがとうございます。

　じゃあ、せっかくなので國森さんにも聞いてみよう。「物足りて心貧しき国かな」、物はいっぱいあるけれど、豊かになったと言うけれども、心貧しき国かなと。心豊かにするにはというようなことで三日月さんからのバトンですので、國森さん、お願いします。

〇國森　康弘さん

　ありがとうございます。

　もしかしたらこの発言が今日の会の最後になるかもしれないのでちょっとお話しさせていただきたいと思うんですけれども、死んだらどうなるのか。例えば、何かの宗教だったら、命の海に帰るとか天国に行くとか魂が解放されるとか、いろいろあるとは思うんですが、科学の面でいっても、自分たちは原子の集合体、仮の集合体ですので、いずれ死んだ場合には原子がばらばらになって、また別の何かに、また何かの仮の集合体になるという意味では、それもまた命の海なのかなというふうに感じています。自分というのは、今は仮の体ではあるけど、またほかの何か、例えばこの机だったり、ほかの動物だったり、海だったり何だったりする原子とまたつながり合って作用し合っているという意味では、「自分とあなた」というのは全く別個ではなくて、同じ、一つなんだと考えることもできるというふうに思っています。

　そんな中なのに、何でこんなに日本の社会が生きづらかったりするのか、何で戦争はないけど自殺が多いのかとか自死が多いのかというのを考えたときには、本当は全体で一つと言ってもいいぐらいのものなのに、一つの物差しでばっかり測る、例えばそれはテストの点だったり、お金をどれだけ稼ぐかだったり、生産性、効率性、言ってみ

れば生産・効率性という一つの物差しでこの社会が大分出来上がっちゃっているので、そこには点数化されてしまうので上がいれば下もいる。だけど、一番上にいたとしても、それはいつか追い抜かれるかもしれない、安心できない。下は、またそれより点数の低い人を見てそれを犠牲にするとか、何かそんなすごい危険な物差しの上に政治も社会もあって、すごい生きづらいんじゃないかなというふうに思ってます。

自分の中では、この生きづらい社会を、もし自分に来世があって総理大臣になる可能性があったら、そのときには――自分は個人的にはベーシックインカムとかベーシックサービスをしたいと思うんですけれども、それは置いといて、自分たちが社会をつくっているんだと。いろんな物差しがあって、自分のありのままでいれて、みんなの多様性を認めて、そして命を全うしていけるような、ある意味では生きやすいと自分は思うんですけれども、そのような社会を自分たちでつくっていく。そして、その社会をつくって命のバトンリレーを大事にできる社会、そういう意識を持てて生きていけたときに初めて、例えば遠い国で戦争が起こっているというその戦争を止めるための抑止力にもなれると思うし、そういう行動を起こす人も増えると思うし、自分たちが社会として、あるいは国としてそういう姿勢を持っていくことができれば、もしかしたら今の戦争だって止めようと動くような流れが生まれるかもしれないというふうに思いますので、自分は今言ったような全てがつながっているというふうに感じています。

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。

残り時間が少なくなってきました。あと感想などを紹介しまして、その後で委員お一人ずつから 20 秒ずつぐらい、これまでの会を踏まえて感想とか、次回――まあ、次回って、来年度もまた何かあるのかなと思いますけれども、一言ずついただきたいと思います。

もう一つだけ、これは質問です。「生老病死、死で終わりでしょうか。宗教は死後の世界を物語りうる唯一の学問だと考えます。宗教者の役割が問われているのではないでしょうか。」と。打本さん、どうでしょうか。

○打本　弘祐さん

宗教は死後の世界を説きますけれども、そこからまた私たちに向かって働きかけてくる、亡くなってもまた死後を越えて私たちに何か問いかけてくるものがあるんだというところを説きます。ですので、必ずしも死が――例えば、私が亡くなる。だけれども、私はそこからまたこの世界に帰ってきて、

人々を導く存在としてもう一回働き直すんだという考え方があります。これが究極的な利他ということですね。これはどうしても親鸞の考えになってしまいますけれども、そういった側面があるということはお伝えしたいなと思います。

○上田　洋平さん

じゃあ、これから感想だけ紹介して、最後、皆さんに 20 秒ずつぐらい振りますので、その間にちょっと考えといていただきたいと思います。

「ミウラさんに同意、死にたい気持ちをしっかりと受け止めて、一緒に生き続けていこうと伝えること、これが大事と思います。」と。

それから、「國森さんのお写真とお話でたくさん泣きました。一方で同じように感じない人や世界もあって、共に存在し、生きている。」、そういう同じように感じない人も共に存在し、生きていると。「誰かのせいにしないように、自分のせいにしないように器用に生きられるものなのでしょうか。」と。誰かのせいにしない、一方で自分のせいにもしないと。

それから、「昨日息子の卒園式で園長先生が、『小学校へ行ってもやれば出来ると信じて頑張ってほしい、友達は宝なのでたくさん作ってほしい』という言葉がありましたが、その結果が、『努力して何かを成し遂げなければならない＝何かが出来る存在にならなければならない』と言った価値観を持った大人になり苦しみ、また、友達がたくさんいないといけないということの延長線上にSNSの承認欲求による苦しみがあると思います。私達も幼稚園の頃からそうした価値観を植え付けられていると感じました。」ということですね。まあ、悪意を持ってそう言っているわけではなく、励ます意味で言っているんだけれども、実は知らない間に時代の価値観がそういうものになっているかもしれないということかな。

「生きたいように生きれる時代と場所に生まれた事に感謝しながら、どんどん老いて行く人間。孤独死もあるけれど、最後は絶対一人じゃないので血がないなら地というのは響いた」と。私のダジャレに響いていただいたというようなこともあります。一方で、尊厳を持って尊厳ある一人として死ぬ、そういう死に方もまた多様な中でできるということも選択肢にあるべきだと思います。

「普段気軽に聞けないようなテーマでのお話を聞けてよかったです。生・死が重くて話しづらいテーマでなく、気軽に話が出来る環境や機会がどこでもどの世代でもあればまた違ってくるのではないかと思います。」と。この場はそれを目指しています。「自分の置かれている立場・環境など、自分が普

段生きているのがあたりまえではなく、大きな力によって周りから、他のものからも生かさしていただいていることを感じる機会となりました。ありがとうございました。」ということでいただいております。そういう意味で、本当に皆さんとこういう場ができたと喜んでおります。

じゃあ、本当に 20 秒ずつぐらい。どこから行こうかな。楠神さんから。

○楠神　渉さん

生とか死についてこの懇話会で考える機会が――あっ、20 秒ですね(笑)。「関わる」ということをちょっと考えたんですけども、私たち、多職種で向き合う関わりをしてしまうことが多いんです。命が急に途切れるとかでも支援方法を提案したりとか。ただ、それだけでは本人さん、家族さんの気持ちは納得できなくて、私も気をつけないといけないなといつも思っているのが、寄り添う支援と言うんですかね、生や死に関して「向き合う」から「寄り添う」に変わって、同じに悲しんで、同じに苦しんで、そうした中でちゃんと本人さんの思いとかが聞けて次につながるのかなと思ってます。

今日、災害とか突然死の話もありましたけども、そのときも向き合う支援だけじゃなくて、ちょっと寄り添って伴走しながらする、そういう関わりができたらいいなと思って関わりについて考えてました。

ありがとうございました。(拍手)

○上田　洋平さん

ありがとうございます。だんだん早口言葉大会になる(笑)。

では、越智さん。

○越智　眞一さん

何かいじめに近いですね(笑)。

今日も含めて、死と生、要は生命について、それから生命の質について考える会だと思うんですね。特に「生きなさい」「何々しなさい」というのを教育の現場で言うのは簡単です。でも、死について教育の現場で触れられることは非常に少ないと思います。ですから、どこかで、各段階で教育現場で取り上げていただくような――それをどういうふうに伝えたらいいかというのは教育の専門家にお任せするとして、各段階でお話をする機会をつくっていただきたいと思います。(拍手)

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。

では、藤井さん。

○藤井　美和さん

私は、やっぱり人間の捉え方というのを見

直さないといけないのではないかなと思います。「生と死」というのは、物体として、生物体としての人間の話ではなくて、人間存在、例えば魂や、自分の限界を超える世界とか、そういうものを含めて、改めて「人間というのは何なのか」「なぜ生きるのか」考える時に来ている。1億円をプレゼントされて、iPS 細胞で自分の臓器を 100 年も 200 年も入れ替えて、それで幸せになれるのかというと、生物体としての人間の幸せと本質的な幸せというのはどこか違うと思うんですね。やっぱり、先ほどのコメントにもありましたけど、人間を超える大きな力とか、神とか宗教とか、そういったものを含めた人間の在り方というのをもう一度見直す時期に来ているのではないかというふうに思います。（拍手）

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。

では、打本さん。

○打本　弘祐さん

今日は、國森さんのお写真からその後の討論も含めて、本当に私自身が問われるということがたくさんあったように思います。その中で私がこの場で何を語れるんだろうか、また皆さんに何を還元できるんだろうかと戸惑う場面がまだまだ自分の中にたくさんあるということ、本当に自分の未熟さ、またこうして語れる場、語っていただける方々のことを自分なりに昇華して、また自分の現場でなるべく平易な言葉で語れるように頑張りたいなと思った次第です。

今日は本当にありがとうございました。（拍手）

○上田　洋平さん

では、ミウラさん。

○ミウラ　ユウさん

この死生懇話会の委員を引き受けたときはコロナの真っ最中で、委員の先生方とまず Zoom でお話ししてから始まったのが、今日はこうして会場に聞いてくださる方や先生方とともにできたことがすごく感慨深いなと。ありがたいなと思います。

先ほど感想で書いてくださってたみたいに友達 100 人は絶対できないので、そんなことをしなくても全くよくて、何かができるから価値があるのではなく、生きていることそのものに価値があるという、そういう思想というか、捉え方が広がったらいいなと思ってます。私にできることは本当に少ないんですけど、これからも大きな声で頑張ってそういうことを言い続けようと思います。

ありがとうございました。（拍手）

○上田　洋平さん

ありがとうございます。

最後に三日月さんに締めていただきますが、本当にここまで皆さんとご一緒してきて、ぐるぐるっと回りながら螺旋状に議論が深まって、今日その伏線が回収されたような気がいたしました。

1つだけ。私の好きな作家にサンテグジュペリという人がいます。その人が「人間の土地」という本の中でこんなことを言っているんですね。「人間であるということは、取りも直さず責任を持つことだ。人間であるということは、自分には関係がないと思われる不幸な出来事に対して忸怩たることだ。人間であるということは、自分の友が勝ち得た勝利を自分の喜びとすることだ。人間であるということは、自分の石をそこに据えながら、世界の建設に加担していると信じることだ」というような言葉を思いながら聞いておりました。

今日、新しいキーワードも含めて、あるいはこれまでのことも思い返すようないろんなキーワードを國森さんからもいただき、またそれを会場の皆さんとともに味わえてよかったなと思っております。

大変拙い進行でありましたが、またしゃべり過ぎだと言われますので、もうここら辺でやめて、三日月さんにお渡ししておしまいにしたいと思います。

では、三日月さん、よろしくお願いします。

○三日月　大造

ありがとうございました。

ウェブで視聴していただく方や、この会場で一緒に考えたり聞いていただく方、そして委員の皆さん、國森さんの写真とかお話――時々しゃべられない時間がありましたよね。私、あの時間から受け取るものがすごく多くて。もちろん写真から出てくるインパクトも大きいし、お言葉から受け止めるメッセージもあったんですけど、何にも語られずに何枚か見せていただいたときに受け止めることもたくさんありました。

私、この死生懇話会をやってから、例えば県庁の中にもワーキンググループをつくって、参加したいなという職員、そして死生と言えば関わるんじゃないかという人たちとまさに立場を超えて時間と空間を共有することがあるんですけど、最初はちょっとぎこちない関係も、お互いが死生について思うところ、経験したこと、考えることを語ることで何か打ち解ける瞬間があるんですね。今日のこの会場とか今日のこの関係もそんな雰囲気を感じて、それを僕はこれから大事にしたいなと思いました。

ガンジス川のバラナシには行ったことないんですけど、死がど真ん中にあるという国や地域があるんだということも学ばせて

いただきましたし、会ったことのない人の死の瞬間、人と人との関わりのことも、まさに國森さんがその生きざまを、命のバトンを大切に受け止めてつないでくれはったからこそ、今日こうして知ることができたということも大事にしたいなと思いました。

私の今年のテーマは「弱さを大事にしましょう」ということなんです。知事として年頭の挨拶に「弱さを大事にしませんか」と職員に問いかけたところ、「なぜ知事が弱さを言うんですか」ということで随分問合せがあったんですけど、とかく強さを強調したがる、できることに目を向けたがる社会に少し違う視点を持つことの大事さをみんなで考えたいなという、そういうメッセージです。

これからもこの死生懇話会は、何か成果を求めてやるということよりも、今一緒に生きている者同士が感じ考え合える場として大事にしていけたらいいなと思いますので、ぜひ皆様方のそれぞれの姿勢や視点でご参加いただければありがたいなと思います。

最後になりましたけれども、今日はすばらしい話題提供や写真、お話をいただいた國森さんに改めて皆さんで感謝の気持ちを拍手で送りたいと思います。本当にありがとうございました。（拍手）

○上田　洋平さん

はい、ありがとうございます。

またどこかで皆さんと、今度は皆さんともっともっとしゃべれる機会が次年度以降できるといいなと思います。ありがとうございます。

では、お返しします。

○事務局（滋賀県企画調整課　山田）

ご出演の皆様、ありがとうございました。また、ご聴講いただきました方々も、長い間、ありがとうございました。

最後に、事務局からのお知らせでございます。

オンラインでご聴講の方には事前のメールで、会場でご聴講の皆様にはお手元の配布物でお知らせしておりますが、本日の懇話会をご聴講いただいてのご意見、ご感想についてアンケートにご協力いただきますよう、お願いいたします。

会場でご聴講の皆様は、アンケートを記入いただきましたら、会場出口に回収ボックスを設置しておりますので、そちらに入れてお帰りいただきますよう、お願いいたします。また、お配りしております鉛筆、マジックは机上に置いてお帰りいただきますよう、お願いいたします。

今年度の死生懇話会はこれで最後になりますが、来年度も「死」「生」あるいは「幸せ」といった根源的なテーマを皆様と一緒に考えたり、語ったりできる機会を設けたい

と考えております。ご案内は県ホームページ等でさせていただきますので、ぜひご参加いただければと思います。

　それでは、最後にご出演の皆様はご聴講いただいた皆様に手を振っていただいて終了としたいと思います。本日は誠にありがとうございました。（拍手）

〔16 時 00 分　閉会〕